

⑤ 新井潤美 著

『自負と偏見のイギリス文化:
J・オースティンの世界』

(岩波書店)

オースティンの長編小説『Pride and Prejudice』(邦訳は『自負と偏見』など)で、勝ち気なヒロインのエリザベスが、恋の相手の青年貴族ダーシーにこんなことを言っています。「私は思慮深いもの、善良なものを笑ったりはしていません。愚かなこと、馬鹿げたことはたしかに面白く思いますし、そういう事柄に出会うたびに笑っていますが。」これがまさにオースティンの笑い。まじめにとるべきものまで笑いの対象とするシニズムとは違い、人間の見栄や虚栄心や愚行を笑います。またそれは、イギリス人がつねに「イギリス的ユーモア」として誇ってきたものでもあります。彼女の作品を通して、イギリス文化に触れてみませんか。

930.268-Ara (N.T.)

⑦ 飯田 操 著

『パブとビールのイギリス』

(平凡社)

「どんな小さな町でも、パブと教会はある」という言葉があるほど、イギリスの国民にとって大きな存在であるパブ。publicの意味を持つパブは、単に酒を飲む場所だけでなく人々の交流の場として親しまれてきました。本書は、パブ、そしてパブで最もよく飲まれているビールの起原から現在までが書かれています。

かつては祝祭の場であったパブが、宗教革命、産業革命や世界大戦を経て、どのように変化していったのか。一杯のビールから見えてくるイギリスの歴史と国民性を覗いてみませんか。

383.8-lid (Y.Y.)



⑥ 佐久間淳一 著

『はじめてみよう言語学』

(研究社)

「なるべく専門用語を使わずに説明しています」と筆者が言うとおり、本書には難しく近寄りかたい単語は登場しません。言葉に関することを話題に先生と生徒二人の対話形式で話が進むので、誰でも気軽に言語学の世界に足を踏み入れることができます。「全然いい」は間違いか、「焼き芋」は「芋焼き」ではいけないのか、文法の授業はなぜつまらないかなど、身近な言葉に対する疑問にも答が見つかる一冊です。

801-Sak (K.K.)

⑧ 井上富紀子、リコ・ドゥブランク 著

『リッツ・カールトン20の秘密(ミスティーク):
一枚のカード(クレド)に込められた成功法則』

(オータパブリケーションズ)

ホスピタリティの高さで世界中の富裕層に人気のホテル、ザ・リッツ・カールトン。著者の井上富紀子は世界中に点在するリッツ・カールトン全てを訪れるという途方もない旅に出発します。各地で出会うスタッフのサービスマインドに触れ、数々の感動を体験した彼女の旅のエピソードが満載です。さらに、彼女が受けたおもてなしの裏側をリッツ・カールトン東京総支配人が明かし、リッツ独自のサービス哲学を紹介しています。将来接客業に就きたい方には必見の一冊。

689.8-Iino (Y.Y.)